

(仮称) 篠路駅周辺地区まちづくり計画 第 4 回地域協議会 議事要旨

【日時】 令和 4 年 6 月 1 4 日 (火) 1 8 : 3 0 ~ 2 0 : 3 0

【場所】 篠路コミュニティセンターホール

【出席者】

○地域協議会委員

所属/役名等	氏名 (敬称略)
太平百合が原連合町内会/会長	庵跡 邦子
篠路地区街づくり促進委員会/会長	井形 信広
わきあいあい篠路まちづくりの会/会長	石本 依子
篠路小学校 PTA/会長	丹藤 大智
拓北・あいの里連合町内会/会長	長尾 由紀子
篠路茨戸地区社会福祉協議会/会長	白戸 黎一
篠路茨戸連合町内会/会長	進藤 幸司
アカツキ交通/常務取締役	春原 啓慶 (欠席)
篠路中央商店街振興組合/副理事長	寺田 哲
区画整理地権者	中西 昌裕
篠路駅前郵便局/局長	西村 司
篠路神社/宮司	森 泰文
しのろ紙袋ランタンまつり実行委員会/実行委員長	吉田 愛美
篠路コミュニティセンター/館長	本橋 幸子

※五十音順

○ オブザーバー

所属/役名等	氏名
北区市民部 篠路出張所/篠路出張所長	上口 敦史

○ 事務局

所属/役名等	氏名
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/事業推進課長	小仲 秀知
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/計画調整担当係長	吉原 康次
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/計画係	平 将太
まちづくり政策局都市計画部 事業推進課/計画係	金野 隼也

【議事・進行】

1 はじめに

- 開会（挨拶、事務連絡）

2 議事（資料1）

- 前回の振り返り
 - 第3回地域協議会のおさらい（別紙1-1）
 - 第3回検討委員会の報告（別紙1-2）
- まちづくり計画について
 - まちづくり計画（素案）（資料2）
- 地域主体のまちづくりについて
 - 次回の社会実験に向けて
 - 今後のスケジュールと課題

3 次回日程の案内など

【議事要旨】

1 はじめに

○ 開会（挨拶、事務連絡）

（事務局）

- ・新型コロナウイルス感染予防を行った上で、会場にて開催した。
- ・本日の会議は、地域の方々から予めからいただいたご意見を踏まえ、委員の皆様と議論させていただいた内容をとりまとめ、まちづくり計画素案を作成した。皆様の忌憚ないご意見をいただきたい。

2 議事

○ 前回の振り返り

➤ 第3回地域協議会のおさらい

（事務局）

【資料1の4ページの説明】

- ・第3回地域協議会での主なご意見を別紙1-1にとりまとめ、いくつか抜粋してご紹介した。
- ・「駅前に関するご意見」、「駅前街区は民有地であり、協力を求める方策は考えているのか。」というご意見を受け、まちづくり計画の内容は随時、地権者様へ情報提供を行っており、地権者様との計画の共有の上、まちづくり計画に資するあり方について話し合いを進めることで協力を求める。
- ・「市有地に関するご意見」、「話し合いばかりで市有地の利活用の具体化が進んでいない。医療・福祉関係の事業者が市有地進出に興味を示している話があった。そういった大きなものを持ってこないで駅前利用者を増やすことは難しい。早く具体化を進めるべき。」とのご意見をいただいた。計画策定の議論を進め着実に具体化段階に移行するよう取組を進める。
- ・「社会実験のアイデアに関するご意見」、「次回はもう少し地域の方に協力をしてもらうのが良い。」というご意見をいただいた。第2回に向けて、地域の皆様との連携を増やしていく。また、「飲食関係の出店を募るのであれば、商店街に協力してもらうと良い。」とのご意見もいただき、商店街との連携・検証を検討する。

➤ 第3回検討委員会の報告

（事務局）

【資料1の5ページの説明】

- ・第3回検討委員会での主なご意見を別紙1-2にとりまとめ、いくつか抜粋してご紹介した。
- ・「駅前エリアについて」、「従来は交通乗り継ぎ拠点として駅前を整備することが基本であるが、最近では姫路の駅前広場や釧路での計画検討等の事例によ

り、人中心の空間を優先した考え方がある。交通機能の駅前広場を整備する必要はないのではないか。篠路駅はコンコースで待つ人もいるので、駅前街区の賑わい、駅前広場、駅舎の3つの関係を再検討する可能性はあるのか。」とのご意見については、社会実験を行う中で地域の方々主体での活用の展開を期待し、議論が進んできた段階で、話し合いをお願いしたい。

- 「東エリアについて」、「札幌市として市有地の賃貸・売却は具体的に考えているのか。」というご意見については、一旦売却を前提に進めるが、賃貸の方が地域に有利となる可能性も視野に入れ検討する。
- 「まちづくり計画全般について」、「これまで議論してきた「まちづくりの方向性」や「市有地・駅前のまちづくりの展開、地域主体のまちづくり活動の展開の考え方」に委員のご意見を反映し、まとめることを事務局にお願いしたい。」とのご意見を受け、「まちづくりの方向性」や「市有地・駅前のまちづくりの展開、地域主体のまちづくり活動の展開の考え方」を計画素案としてとりまとめた。

<質疑応答>

質疑なし

○ まちづくり計画について

➤ まちづくり計画（素案）

（事務局）

【資料1の8ページの説明】

- 今回が第4回地域協議会では、まちづくり計画素案の確認を行う。次の第5回地域協議会が計画に最後の協議会となる。また、パブリックコメントを通して、市民の方々に幅広い意見をいただき、反映させたものを計画案とし、今年度のまちづくり計画の策定を予定している。

【資料2の説明】

- 計画書の素案については、地域協議会・検討委員会での議論をまとめ、本書と概要版を作成した。表紙には、昨年度、篠路小学校の3年生に描いていただいた「私たちが住みたい篠路のまち」の絵を掲載している。本日は概要版を基に説明を行う。大きな構成として「1. 背景と位置づけ、目的」から「10. まちづくりの展開・土地利用の展開」の10項目がある。11、12項目は参考として、過去のワークショップや地域協議会・検討委員会等のまとめと、ワークショップやアンケートの集計したものを添付している。
- 「1. 背景と位置づけ、目的」、篠路は札幌市内で17か所ある、地域交流拠点として位置づけられており、北区北部3部地区（拓北・あいの里・篠路・茨戸・太平・百合が原）の生活を支える役割を担っている。現在、交通混雑解消のため、鉄道高架事業や脆弱な社会基盤や交通結節点としての機能強化を目的とした土地区画整理事業や周辺道路の拡幅事業等の社会基盤整備を進めているが、東口駅前や篠路コミュニティセンター周辺にある低末利用の

市有地の活用が課題である。これまでのワークショップや地域アンケート、企業ヒアリング、地域協議会・検討委員会での議論を反映させ、「低末利用地の活用」と「土地利用と一体となる地域主体のまちづくり活動」について長期的な方向性や展開をとりまとめる。

- 「2. 重点エリアの設定」、篠路駅周辺は札幌市が定める都市機能誘導区域を含み、土地区画整理事業が進行中である等、新たな土地利用が期待されるエリアである。都市機能誘導区域とは、駅からの近接性や土地利用の連続性等を考慮しつつ、市民が利用する公共施設等を集約し、利便性と魅力を向上させる区域として札幌市が指定している。また、低末利用となっているコミセン周辺の市有地A、B、Cは、有効な利活用が求められる地区であり、2つのエリアを重点エリアとして設定し、まちづくりを進める上での特に重要なエリアとする。なお、西エリアを加えた3つのエリアは北区北部3地区を公共交通や幹線道路でつなぐエリアである。北部3地区はそれぞれの生活利便性施設が集積しており、生活圏を形成している。行政拠点の出張所や交流施設であるコミセンは篠路に位置する。
- 「3. 篠路地区の現況等」、地区にとってプラスとなるような項目については赤い丸、マイナス面として青い丸で示している。篠路地区は9割以上が住宅、特に戸建て住宅が7割を超える住宅街であり、子どもが生まれて家を買ひ、篠路に移り住む子育て世代の方の流入が多いといった特徴がある。一方、総人口の減少や進学・就職を機に篠路から他の地区や道外へ転出する若者が多いことや高齢化が進み、老年人口割合が増加していく特徴もある。地域資源として、古くからの歴史がある篠路神社やレンガ倉庫等の建築物、旧琴似川沿いの緑道、五ノ戸の森緑地等の自然、藍染・篠路歌舞伎等の文化が数多く残され継承されている。また、多様な地域団体によるイベントや地域活動が行われている一方で、駅前が閑散としていて寂しいといったご意見をいただいた。過去に行ったアンケートでは、買物施設の充実、高齢者に優しいまちづくり、子育てしやすい環境、地域の多様な世代が交流する場の創出、働く場の創出等を多くの方が望まれ、その他、企業ヒアリングや札幌市の上位計画を踏まえて、課題の整理を行った。篠路を選んだ若い世代や高齢者にとって住みやすいまちづくりを進めていくこと、日常的な地域コミュニティを強化すること、地域交流拠点としての魅力を向上させること、交流・賑わいの場を創出すること、地域資源を共有することの5つを課題として整理した。
- 「4. 検討過程・検討体制」、平成28年～令和元年にかけてワークショップやアンケート、駅前広場のあり方検討会議が行われてきた。これらのご意見を基本とし、令和2年から地域協議会・検討委員会を実施し、今年度末、計画策定の予定である。また、将来のまちづくり活動を見据えた社会実験も並行して行う。
- 「5. まちづくり計画」、平成28年にワークショップでとりとめた「みんなの想い」を基礎とし、まちづくり基本方針を整理した。「みんなの想い」で掲げた基本理念「誰もが暮らしやすく笑顔あふれるまち」と「目指すまちの

将来像」の「暮らし」、「つなぎ」、「魅力」をベースにエリアの方向性をまとめた。将来、篠路地区を含め日本全体として人口減少が予測されており、数十年先も見据えた方向性を考えることが重要である。また、生活関連サービスの縮小などによる生活利便性の低下、住民組織の担い手不足による、地域コミュニティの低下などが懸念され、さらなる人口減少を招く悪循環も想定される。「人口減少局面でも豊かで持続的なまち」と「地域の魅力・コミュニティが発展するまち」の2つを実現したいまちの将来像として、長期的に目指していくことが求められる。エリア全体の方向性としては、「広域的に機能をバランスよく配置し、東西一体の拠点を形成」と「社会基盤整備による東西市街地の回遊性の向上」を掲げている。駅前エリアは「暮らしに必要な機能と、人々の交流機能により魅力的な駅前を演出」、東エリアについては「多様な機能の集積により人々が活動し、地域の活力源となるエリア」を、目指す方向性とした。

- 「6. まちづくりの協働の考え方」、まちづくりは行政だけの取組ではなく、地域の方や企業など様々な立場の関係者が協働で取り組んでいくものあり、地域住民の方には、「様々な場所・アイデアで地域の魅力を高める活動・取組を展開していくこと」が期待される。今後人口減少や少子高齢化が進んでいく中で、建設資材、燃料費、人件費の高騰や、インターネットを用いた通信販売の普及、新型コロナウイルスの影響など、時代の変化や厳しい財政状況の中では、民間の活力を活用することにより、サービスの向上やコストの縮減を図り、効果的にまちづくりを進めていくことが重要である。民間企業の方には、地域の皆様のご意見を踏まえた土地利用の方向性を共有し、企業の強み・ノウハウを活かしながら具体化を進めていただく。行政は、社会基盤整備を進めるとともに、民間企業とまちづくり計画を共有しながら、市有地・駅前の具体化を進め、地域の活動、取組を支援していく。このように3者の連携により、目指すべき将来像の実現を図る。
- 「7. 土地利用計画図」、重点エリアの方向性をコンセプトとして、中心となる機能、望ましい機能例、展開方針などをまとめた。駅前については、生活利便性を向上する商業機能、地域コミュニティの拠点となる交流機能が望ましい。具体的には日常の買い物施設や、飲食店、多世代が集まり交流できる機能、オープンスペースやコミュニティスペースなど。駅前は民有地であるため、地権者様とこのまちづくり計画を共有し、連携しながら、生活利便機能や交流機能を導入していきたいと考えている。東エリアについてはまちに活力を生む業務・教育機能や、家族で利用できる商業機能が望ましい。篠路は昼間の人口が少なく、通勤・通学で地区外へ出ていく人が多い、というデータがあり、若い世代や就労者を地域に呼び込めることができれば、関係人口が増え、日中の活動が増えることで地域の活性化につなげることができる。また、休日などに家族で利用できる商業・レジャー機能や子育て世代が交流できる機能は人口流入や地域の活力につながる。配慮事項として、市有地Aの周辺は福祉施設が既に立地しているため、周辺環境に調和する機能の誘致

を目指す。市有地については札幌市の土地のため、比較的自由度が高い、地区の関係人口、定住人口増加につながる利活用を、民間活力等を導入しながら展開していくことや、地域交流拠点にふさわしい公共貢献を誘導する。

- ・「8. 北区北部3地区の地域交流拠点の役割」、今後、団塊の世代がすべて75歳以上の後期高齢者となり人口の年齢別比率が劇的に変化する分岐点となる2025年を迎える。後期高齢者の増加や、運転免許返納者の増加が予測される中、公共交通によるアクセス性の確保が重要である。拓北・あいの里や太平・百合が原地区と、公共交通でつながる3つのエリアそれぞれに必要な食料や日用品の買物機能があれば、篠路にとってだけでなく、北区北部地区にとって持続可能なまちづくりが可能となる。また、持続的な歩いて暮らせるまちの形成につながると考え、子育て世代にとっても高齢者にとっても魅力アップにつながる。
- ・「9. 地域主体のまちづくり活動」、新しく整備される駅前や市有地を作って完了とせず、将来の地域活動、交流・にぎわいの場として活用していただきたい、と考えている。活動の方針として3つ掲げており、「1.多世代が交流する笑顔あふれるコミュニティを創出する」、「2.歴史、文化、自然を有効活用する」、「3.持続できるまちづくり体制を構築する」である。このような取組を、社会実験を通じながら整備内容や、運用ルールに反映していき、将来の活動につなげていきたい。
- ・「10. まちづくりの展開・土地利用の展開」、まちづくり計画の策定後は、早期に活用可能な、市有地A・Cの具体化を先行する。市有地A・Cでは関係人口の増加や活動の増加といった、地区のポテンシャル向上につながる利活用を目指し、次に、社会基盤整備の進捗や効果を見極めつつ、現在の利用状況を踏まえて、駅前街区・市有地Bの具体化を進め、さらに周辺への波及を目指す。このように、開発を一気に進めるのではなく、段階的に進めていくことが重要と考える。

<質疑応答>

意見なし

○ 地域主体のまちづくりについて

- 次回の社会実験に向けて

(事務局)

【資料1の13ページの説明】

- ・今年度のシノロリビングは、2022年8月25日(木)～28日(日)の4日間となっており、昨年度同様に札幌市主催とし、篠路駅東口前(民有地)での開催を予定している。情報発信は、札幌市HP、ポスター掲示、SNS、新聞折込を予定、SNSについては、Facebookを継続し、新規にInstagramを追加し、並行して周知を行う。

【資料1の14ページの説明】

- 社会実験（シノロリビング）とは、地域協議会・検討委員会で「居場所づくり、コミュニティづくり、少しずつまちをかえていく仕組み」等の必要性に係るご意見をいただき、それを踏まえて地域の方々からご意見のあった場の「使い方」のアイデアについて試行的に実施、場づくりへ反映させるための空間利用の需要や可能性の検証を行う。

【資料1の15ページの説明】

- 社会実験の目的は2点ある。1点目は、篠路駅周辺において、誰もが憩い、集い、活動できる場の必要性・可能性やその空間のあり方の検討の基礎資料とするため、まちの「居場所」の可能性を探る。2点目は、地域活動・アクティビティを「可視化」とすると共に、地域協働の可能性、篠路駅周辺地区でまちづくり活動されている組織・団体やお住まいの方同士がつながり連携するためのコミュニティのあり方の検討の基礎資料とするために、地域の「コミュニティ」の可能性を探る。
- 本社会実験は、イベント・催事とは異なり、今後の空間整備やコミュニティ活動発展に向けたファーストステップとしてとらえる。引続き地域連携により、継続的・発展的にこのような社会実験を積重ねていくことを想定したものととなり、回を重ねるごとに多くの方の連携が深まり、篠路駅周辺においてより良いまちづくりが展開されていくことを期待して、「スモールスタート（小さいことから始めよう）」という意識のもと企画検討を行う。

【資料1の16ページの説明】

- 「第1回シノロリビングについて振り返り」、昨年度は8日間実施し、合計で約400人の利用があった。芝生や椅子、テーブル、ベンチ等の憩いの場を整備しアカプラに出店しているようなキッチンカーを誘致した。キッチンカーの来た休日昼間、主に子育て世代を中心として利用を確認した。一方で、使われない時間、世代の需要の検証やより多くの機能を確認すること、また、地域との関わりしるを増やすことが課題となった。

【資料1の17ページの説明】

- 今年度のシノロリビングの取組について、地域からのご意見を踏まえ、まちづくり計画の将来像・地域活動の展開方針、敷地の規模等の要件から実施できるものを抽出する。例えば前回の協議会では、「もう少し地域の方に協力してもらった方が良い」、「飲食をたのしみながら、地元の子どもの活動発表」や「地域文化的な催し」、「篠路の野菜販売」等のご意見を頂いた。また、今年度は夏季にシノロリビングを開催するが、同様の憩いの場のあり方を季節を変えて検証するほか、実施できる取組みや地域の関わりしるを増やした形で行えるよう企画検討を進めている。

【資料1の18ページの説明】

- 検討しているコンテンツのイメージについて、広場空間は昨年度と同様に芝生やベンチ等で憩いの場をつくるほか、何かしら発表できる空間の整備を検討、場の設えについては、昨年度から引続き検討委員会の委員である北海道大学 小澤教授の研究室と連携した組立和室を設置する。地域出店、マルシ

エ、移動図書館の出店を検討しており、コンテンツを強化していく考えである。また、多世代が来場し文化に触れる機会として、ランタンWSや藍染め体験、子ども向け・高齢者向けのWSを検討、他にも、上映会やトークイベントといった交流の機会も企画検討している。

- ・レイアウトとして、三角広場には芝生広場を囲うように組立和室やキッチンカー、ファニーチャの設置、四角形の広場に対しては、可動式のテーブルや椅子でワークショップ等を取組むことができるようにし、また、小ステージの配置を検討している。

【資料1の19ページの説明】

- ・シノロリビング実施に向けて、事前準備として8月中旬（16日～19日）ごろに草刈の実施を考えており、前日準備は24日、開催本番日には、看板等の設営を行い、シノロリビング終了翌日8月29日に片付けを実施する。

<質疑応答>

（委員）

- ・8月25日～28日の4日間の開催とのことだが、時間帯はいつ頃なのか。

（事務局）

- ・朝10時～夜8時までを予定しているが、様々なことを調整してから時間帯を決める。

（委員）

- ・社会実験の2つの目的について、前回のシノロリビングは開催が秋口であったため、非常に寒かった。また、周知もギリギリであった。社会実験とは何のための実験なのか、改めて教えてほしい。

（事務局）

- ・1点目は、10年後のまちづくりを目指した上で、マーケティングや空間の作り方を反映させていくことを考えている。2点目は、子どもとの交流や地域活動の発表等で地域のコミュニティが高まっていくことが将来、空間活用につながっていくと考えており、10年後に向けて地域のコミュニティのあり方を検証しながら積重ねていくことが大事である。

（委員）

- ・4日間開催するに当たって、あの場所、広さで朝10時～夜8時まで行くと、人を集められるだけの企画は難しい。土日の短時間での開催等、的を絞った企画にすればどうか。例えば篠路神社の例大祭のように、飲食が数多くあった方が、活気が良いのではないか。

（事務局）

- 例えば、土日に人が集まるのが篠路の特性であれば、平日は違う場の使い方をして、土日に魅力あるまちづくり。また、1週間通して、賑わいのある場合は、1週間通して利用できる広場を作るなど、そういった検証を踏まえて、活かしていく。広場は何もない空間なので、過大なものを整備すると、寂しさと呼び起こす可能性がある。検証を踏まえて、た広場を作る方法に活かしていきたい。

(委員)

- 「広場」というキーワードについて、別紙1-2「駅前エリアについて」の回答で「社会実験を行う中で地域の方々主体での活用の展開を期待し、議論が進んできた段階で、話し合いをお願いしたい。」と説明いただいた。この社会実験とはシノロリビングのことで、社会実験を実施していく中で、交通広場のあり方を再検討するという理解でよいか。

(事務局)

- 別紙1-2の内容は、検討委員会でご質問を受けた内容に対する回答である。区画整理事業が終わり、ある程度広い街区ができた際、計画する施設にどういった機能を設けることと合わせて、活用できる空間を考えた時、皆様がその場でどういった空間の使い方をするのか、柔軟性がある状態なので駅前広場と連携したにぎわいの創出等について再検討する可能性があるという回答をしている。

➤ 今後のスケジュールと課題

(事務局)

【資料1の22ページの説明】

- まちづくり計画では、皆様からのご意見や検討を踏まえ、22ページのような位置づけをしており、地域主体のまちづくり活動には、多様なアイデア・担い手が必要である。例えば、学生、子育て世代、アクティブシニア、新たな担い手の発掘と現在、地域で活躍している方々と連携を目指しつつ、多様な活動を行いやすいまちづくりの体制や取組が活動しやすい体制を目指す。

【資料1の23ページ】

- 官民連携のまちづくりの取組として、「シノロリビング」を地域協議会と連携して行っている。この地域協議会はまちづくり計画を策定することが役割であるため、次回の地域協議会を最後にこの地区のまちづくりと連携していく地域組織がなくなる。まちづくり計画に位置づけしている目指す姿を実現するため、また、篠路地域をより良いまちづくりに育てていくために今後、地域はどのように関わるべきかが課題となる。

【資料1の24ページの説明】

- 参考として、まちづくり活動を地域主体で実施し、課題解決を行っている事例をいくつかご紹介する。その後、3班に分かれ意見交換を行う。

【資料1の25ページの説明】

- ・「福井駅前の中心市街地」、福井市の人口は、約26万人の県庁所在地である。駅前に百貨店や商店街がある中心市街地でかつては、賑わいのある地域だったが、大型郊外店舗の増加等、市街地の求心力が衰えていき、空き店舗が増え、駐車場として活用する土地が増えていき空洞化が進んだことでまちの魅力が低下した。そうした地域のオープンスペースを活用し、まちの魅力を高めた事例である。

【資料1の26ページの説明】

- ・このオープンスペースの活用は、元々行政と大学が暫定的にスタートした取組である。期限のあるものだが、取組開始2年後の2016年に、オープンスペース周辺の地元店主らが運営主体となることに手が挙がったため、地域の商店街組合を母体とする運営組織に移行した。取組の支援で大学が手伝いをしているが、基本的には行政の支援はなく、地域で自立して運営を行っている。地域発意の取組として、「ピアパーク」等を開催、その結果、商店外メンバー以外にも参加者が増え、より多様な方々が関わりを持てるよう商店街組合を母体としない任意団体へ形を変え取組を継続し、周辺の空き店舗へ入居者が入る等、まち全体へ取組の効果が波及していった。

【資料1の27ページの説明】

- ・「福島県須賀川市」、須賀川市は人口約7万人のまちで、福井市と同じ商店等が連なる中心街地の事例である。ここでは、まちの路地、広場、民地、役所等、様々な場所を活用した地域主体の手作り市「通称：R o j i m a」を月1回行っている。

【資料1の28ページの説明】

- ・震災復興を背景に、商店街のリノベーションや起業者と連携したリース事業を行政と民間が連携しながら、まちづくりを行っており、地域の担い手は主に退職後の高齢者が中心だったが、こうした取組を通じて地域の若手から「路地を活かしたイベントをしたい」という発意をいただき、「R o j i m a 実行委員会」という委員会組織を立ち上げ取組を展開した。当初は、25店舗ほど出店したが、継続的な取組を通じて近年は100を超える店舗が出店する取組に育ち、運営組織もそれに合わせて法人化している。また、この取組は手作りの雑貨やお菓子、六次産業等に出店を限定している、そうしたことから子育て中の若い世代に人気があり、近しい活動をしている出店者同士の交流の機会になっている。こうした取組から、地域の店舗への入店や有休不動産の活用を希望する不動産オーナーも増加し、市場の活性化にもつながっている。

【資料1の29ページの説明】

- ・住宅地での取組事例として、東京都東久留米市の団地「ひばりが丘団地」をご紹介します。団地世帯数は約2,700世帯で計画された団地だが、老朽化した団地の再生を契機に生活者をターゲットにしたエリア価値の向上を目指した取組である。ここでのエリア価値は「地域の方々のつながり、日常を

より楽しく、困った時に助け合える関係」が挙げられる。

【資料1の30ページの説明】

- ・シノロリビングのように、地域のオープンスペースを活用した地域活動やマルシェ・キッチンカー等によるイベント、また、拠点施設がありその運営、子育て世代向けの絵本の読み聞かせイベント等を地域主体の団体で行っている。経緯としては、団地再生を契機に行政・UR等が再生に係る事業者や必要な専門人材、財政的な支援を行い、組織作りに向けた下支えを行い、一定の助走期間で地域連携の関わりしろを広げつつ、最終的に2020年には、拠点施設や取組を運営する「一般社団法人 まちにわ ひばりが丘」を地域周辺の住民のみの運営体制へ移行した。コミュニティスペースの運営、カフェ、共同菜園、また人材を育てる取組としてボランティアの育成講座等、情報のインプットの機会を設ける等、継続的にエリア価値を高める取組を展開している。

<意見交換>

意見交換の内容については、別紙にてとりまとめ

<まとめ>

【1班】

- ・社会実験やまちづくりに関して、具体的な目的をまとめるべきである。どういうふうに目的を明確にしていくのかは、今ある組織間での話し合いが必要であること、そしてお互いの問題点が、地域の問題点または、課題であることを抽出した方がよい。具体的には、各団体から代表を集めた組織が必要である。

【2班】

- ・将来的な話の中で、駅前の空間をどのように使用するのか、また、運営はどういう体制でどういった人たちなのかが議論の中にあっただ。区画整理を中心にこれから作られる空間を活用する人が、特定の業者や建物ではなく、空間全体のエリアの皆様でプロデュースする仕組みが必要である。当然、地域の方も積極的に関わるべきである。
- ・シノロリビングについても、場を作るだけでなく、地域の方が入り込んでいくためのきっかけとして利用していき、地域と関わっていきたいと考えている若い世代との場にしていく。関わり方については、漠然としているため、明確なテーマをきめることにより、多くの人を集めることができ、また、次のステージにつなげるために、地域協議会のような場が引き続き必要である。

【3班】

- ・10年後を目指す社会実験の取組とまちづくり計画に位置づけについて、10年間も待ってられないため、何か取組を始めた方がよい。そこには、現在、活動している方々や若い世代との意見交換の場を積極的に取り入れた方

が良い。今後篠路に住んでいく方々と連携することが重要である。また、若い世代の方がシノロリビングや意見交換の場に入ることは少しハードルが高いところもある。そこに対しては、行政側のフォローもした方が良い。

- 社会実験やシノロリビングには、自主性が重要なキーワードである。地域の方々が盛り上がり、達成感や成功体験につながるような取組が良い。また、シノロリビングを通じて、行った取組については、高架下や駅前広場これからまだまだ動くような場所などに取組の結果を、つくった場づくりを巻き込んでいくようなことをしていくような「ハードづくりに落とししていくことが大切」であり、情報発信については、駅前でやるべきであり、篠路神社をPRするような取組が良い。ハード整備については、若い世代が利用する空間作りであったり、新しく技術が進んでいるところは、オンデマンドバス等を取り入れた方が良い。

【全体総括】

- 地域協議会に参加している皆様が、様々な組織に属していて活動している。そういった活動を駅前で広げた方が、エリア価値が高くなるとの意識を強く持っており、若い世代等、地域協議会に参加していない方々も巻き込む機会を作っていくことが共有項目である。その中で、地域主体のシノロリビングがまちづくりの良いきっかけとなり、活用していったら良い。また、まちづくり計画の中で10年後を掲げているが、区画整理等が進んでいく中で、次の篠路を担えるようなまちづくりにつながっていくのではないかと。

3 次回日程の案内など

(事務局)

- まちづくり計画の内容は、庁内で議論し、次回結果を報告したい。社会実験については、本日のご意見を踏まえ次回、提案する考えである。また、今回の議論結果は、町内会の回覧に配布する予定である。